

## H. ヘッセ『クラインとワグナー』について

—— 市民と犯罪者 ——

磯 弘 治

1919年ヘルマン・ヘッセはベルンでの住いであった画家ベルティーの家からイタリアにほど近い南スイスのテッシン地方に居を求めた。そしてこの年の5月、ルガーノのモンタニョーラの丘にあってルガーノ湖を見渡すカムッチの家に部屋を借りて孤独で不如意だが、その反面、自由な生活を開始した。ヘッセ41才の時である。転居後、間もなく「クラインとワグナー」„Klein und Wagner“ が誕生し、雑誌 *Vivos Voco* に発表された。この作品は1920年には、他の2編「クリングゾル最後の夏」„Klingsors letzter Sommer“ 「子供の心」 „Kinderseele“ とともに新たに „Klingsors letzter Sommer“ のタイトルでまとめられ出版されている。

これまで、主要な登場人物が自殺をとげる 作品はいくつか見られた。「車輪の下」 „Unterm Rat“ では若い神学校生が、「春の嵐」 „Gertrud“ では音楽家が、「クヌルプ」 „Knulp“ では失恋の痛手から放浪者となった男などがそうである。「クラインとワグナー」では主人公であるどこにでも見い出せる平凡な勤め人が——上記の作品との相違は彼が犯罪を犯す点であるのだが——自殺をはかるのである。違和感に満ちた日常的現実からの逃亡者フリードリヒ・クラインが死に到るまでの経緯に記された市民と犯罪者に対する詩人の感情の流れを考えてみたい。

逃 亡

勤め先の金を横領したクラインが無意識に選んだ逃亡先の南国へ向う急行列車にうずくまっている場面から物語は展開してゆく。かれは緊張と興奮に



ふるえるばかりで、かれを横領という犯行へかりたてたものの正体にはいまだに気づかないでいる。

「人間の行為というものが正しいものも正しくないものも、社会的なものも非社会的なものも、つねに心身両面の組織の産物であり人間を包む自然的・社会的雰囲気<sup>1)</sup>の産物であるから…人間のうちとそにおける諸事実が力動的に作用し合う相互作用のなかに犯罪の原因を求める視角が心要である」としたら、市民クラインのうちとそに何があったのだろうか。

クラインは実直な勤め人であり、妻と子とともにささやかなそして穏やかな生活を営む平凡な市民のはずであった。それだけに犯罪者という取り返しのつかない状況にとりみだし、絶望し、死にたいとさえ望むのである。また、かれは説明できないものにものに<sup>2)</sup>圧迫されていると感じ、更には「狂気、不眠、警察、死に対する不安」を<sup>2)</sup>もいだいている。

人間にはさまざまな生活態度がある。千変万化する現実の情勢の変動にあわせて皮膚の色を、そしてその模様とをかえる態度、全貌を見ようとしても不可能なほどに巨大で異様な姿の現実を前にして、その汚濁と醜悪を曝く態度、それとも、それら一切を自分に帰して沈黙する態度などがあるだろう。しかしいずれにせよ苦痛と疲労を免除された態度を人間はもちえないだろう。したがって、クラインの生活の裏面に「かれの生涯におけるもっとも熱烈な二つの願望」S. 472 すなわち「南国へのあこがれ」「結婚生活の夫役と塵埃からの逃避と解放」が常に燦り続けていたとしても無理からぬ次第と言えるだろう。クラインはかれの妻こそがこの願望を抱かせた張本人だと思い込んでおり、この妻こそが、かれを夫、父、市民としての責務にのみ縛りつけ、自由な生の比喩である青春と、「高く舞いあがる青春の夢、ローエングリーンの夢を、ほとんど破壊し窒息させてしまった」<sup>3)</sup>と思いこんでいる。まるで、膿と

---

テキストは Hermann Hesse Gesammelte Schriften Suhrkamp 1970 Band 3 „Klein und Wagner” を用いた、引用は (S.) で示す

- 1) 平尾靖：犯罪と非行の心理 川島書店 S. 5
- 2) Hugo Ball : Hermann Hesse, Suhrkamp 1972 S. 170
- 3) a. a. O. S. 172



瘡蓋だらけの日常生活に向けられた感情を、妻という特定な対象に向けてフラストレーションと緊張状態から逃れようとするある種の「置き換え」的行為あるいは象徴化のように見える。ちなみに、ヘッセ自身の結婚生活に目を向けてみると、1904年に結婚したマリア・ベルヌイとの生活は1911年頃から内的外的理由——特に1914年には夫人の精神病の前兆——が重なり結局1923年に離婚している。そして1924年のルート・ヴェンガーとの二度目の結婚生活もうまくゆかず、3年後には不幸な結果が生ずるのである。そして1927年に始まったニノン・ドルビンとの交際が実を結び1931年に正式に結婚することとなり、彼女が詩人の終生の伴侶となるのである。

「友よ、その調子をやめよう！」„1914年 O. Freunde nicht diese Töne!“の発表とともに始まった時代の中傷と誤解、そして内省と分裂のなかで誕生した「デミアン」„Demian“で詩人ヘッセは新生の志念を示した。物語デミアンのもつ不思議な魅力は、事件の異常性、状況の新奇性、人間関係の異様性にあるのではなくて、むしろ日常の現実性を深く見つめることによって生じる内面的緊張がもたらしたわけで、その具体的行為の第一歩であるモンタニューラへの転居とそこで孤独な生活は市民クラインの願望と一致している。肉体的かつ経済的にもっとも困窮していたと思われる時期に、自己自身と一致する以外のことには煩わされまいとする詩人の妻子を他へ預けてまでもひたすら自己の内部に沈潜しようとする錯綜とした想いがあったのだろう。したがってクラインの犯行の背後にはなにか屈折した意志の表現が隠されているのも当然のように思われる。

自分の「生」が外部の何ものかによって操られ、動され、自分の行動が自分の意志とは関係なく生じたと感じる市民ヘッセには、生活の新しい展開への決断は失われ、虚しさに満ちた行動の連続があるばかりだった。それだけに一層、見知らぬ南国の駅に降りたった逃亡者クラインには「たとえば、未知の世界がかれを困惑させ、ひそかに不安にさせたとしても、やはり陶醉と忘却そして試したことのない新しい感情のにおいがしたのである。」(S. 474) ちなみにフーゴ・バルは舞台とされている南国はルガーノに他ならないとして



<sup>4)</sup>  
いる。

しかし犯罪者はまだこの時点では日常的現実から逃避したにすぎない、不安や恐怖は依然として減少してはいない。自己の内部の秩序をとりもどそうと努める犯罪者に、家族、職業といった狭い集団に於ける位置というある種の規制に無理に押し込められた「生」と自己自身が本当にそうありたいと願っている「生」との間の深淵の認識が芽ばえはじめる。内部に有している無数の欲求のなかの一つを自分の意志として選んでいることを、意志としての行為の可能性をほとんど無限に有しているにもかかわらずそれらを知らないでいたのだ。世俗の秩序、モラルあるいは常識などにのみ従う「生」、換言すれば「自分自身から逃げだして、自分の実存を匿名の群集という真正でない状態に落ちこませてしまうために、自分自身からも疎外される」<sup>5)</sup>それが市民クラインの日常的現実<sup>6)</sup>に他ならなかったのである。市民にとって、日常生活の主題は本当の自己を包んでいるいわば皮膚としての自分は傷つきたくないという点であり、貪慾、不信、競争心などから人々は互いに避けあうのである。生活にとって秩序は絶対不可欠のものではあるだろう、しかしその一方で、現に在る秩序は安定していて調和がとれているもののように思い込みやすい。したがって、一度秩序の突然の変動を想うとき、市民はそこに生じるであろう分裂と不安定を危惧するのである。F. ベトガーは物語「クラインとワグナー」について「冒険家とか紳士ふうな詐欺師…が新しいのではなく、むしろ制御されるものと制御されないもの、合理的なものと非合理的衝動的なもの、秩序の遵守と犯罪の反社会性などから生じている戦後の市民的人間の二重性が新しいのである」<sup>6)</sup>と述べているように、クラインの犯行は犯罪一悪一がつねに有しているデモニッシュな魅力、すなわち、現在の状況が全く無味乾燥で退屈きわまりないものと感じられ、それを打ち破ろうとする想いから生じているかのごとく見受けられはするが、しかし本当はクラインの内

4) a. a. O. S. 172

5) F. パッペンハイム（栗田賢三訳）：近代人の疎外 S. 29

6) Fritz Böttger : Hermann Hesse. Verlag der Nation Berlin S. 271



部には、不確実で未知なものへの身を乗りだすことよりも、慣れ親んだ不十分さを我慢する生活とそのなかに浸っている自分を嫌悪する別のクラインがあって、かれが市民クラインを犯罪者クラインとかりたてたのである。意識の更に下にある欲求——もう一人のクライン——が実はかれの行動を規定して隠れたバネなのである。

クラインの不安はこの秘かな原動力がいったい何をしでかそうとするのかという不安であり、同時に、市民クラインが内部の声を無理に沈黙させようとすれば、押えつけられている自己自身を殺してしまう恐怖であり、また結果として生ずる自己自身から疎外された存在になりかねない状況に生きているという葛藤がもたらすところの不安でもあるのだろう。

南国の町は「かれにとってゲーテとかヴィンケルマンが彼らの精神を浄化したようなそんな高雅なところではなく夢想的な南国そのもので勝手気ままで無秩序な…そこでは寄生的ブルジュア、小市民的ボヘミアンが楽園にでもいるような、そして幻想的な満足感をもってただ漫然とあてもなく暮している」<sup>7)</sup>にすぎない町なのである。南国はヘッセに新しい環境という意味の刺激を与えはしただろう、新しい環境においても、しかし誰もが「習慣や市民らしさの束縛や扮装を脱ぎ捨ててしまうと…自分のなかに見いだすかもしれない野獣や悪魔にたいする恐怖」(S. 490)を感じていることにはかわりはない。ひとが他の人間、周囲の世界を功利主義的観点から眺め、およそ冷淡な関与の仕方しか持ちえない以上は、犯罪者であり逃亡者クラインにとってこの南国は絶縁し逸脱した世界と同様に既成の戒律との対立と相剋をもたらし、内部の安定と調和の獲得は依然として不可能なのである。刺激と新鮮な感情とはクライン内部の市民的沈澱物がいだいたに他ならない。この沈澱物が強い悔恨と罪業感を生む源であり、勤め人クラインと犯罪者クライン、明と暗の内的二重性の矛盾を克服できないままに、クラインはかれの否定していた「生」と真正な「生」の間で混乱し分裂し模索しているのである。かれの行為は歪な精神形態と構造を促す市民的社会秩序に対する単純な抵抗の具体化というわけ

7) a. a. O. S. 273



ではない、「ひとがさがしそして学ばねばならない別の思想…それはある状態、ある内的な状況」(S. 492) への詩人の手探ぐりに他ならない。

## 孤 独

無力感、孤独感にさいなまれながらも、いつしか眠りこんだクラインに夢が運命を啓示する。

「クラインは自動車の助手席にすわっていた、車は性急にそしてかなり無謀に町を通り抜け、坂をのぼりくだりして走った。かれのとなりに誰かがすわっていて運転していた。クラインはかれの腹を一突きしてかれの手からハンドルをもぎとり自分で運転した」(S. 470)

他ならぬ自分が一人で車を疾走させる行為は内的必然性から発し、内的充足をとまっていたからこそ「解放」と「勝利」に似た気分をもたらすことを予感させる。夢想した行為に打算はなかった、独自の選択により、独自の「生」を形成していた、もはや他人の目的達成を助長する道具のような存在ではなかった。この夢が示している予感のうちでもっとも重要で価値をもつものは、神聖なる市民の義務を放棄して孤独になることである。第一次大戦後、ドイツの混乱と暗い絶望感しか知らない青年に与えた「ツェラッストラの再来」„1919年 *Zarathustras Wiederkehr*” に「孤独」に関する次の一節がある。

「孤独を見いだしたひと…自己の唯一の自分にのみ定められた孤独を見いだしたひとは幸いである…そのひとのところへ運命は来る、そのひとから行為は生じる」<sup>8)</sup>

孤独こそが真生な生への唯一の伴侶であり意志をのり越えた必然の衝動が求めるものなのである。

自己の内部に調和し安定した状態を求める犯罪者クラインの心に妻子を殺害し自殺した殺人犯ワグナーの名が浮かびあがる。この残酷な殺人に関する市民クラインの最初の反応は激しい憤りだけであった、しかしいま犯罪者と

8) H. H. G. S. Bd. 7. S. 217.



なったかれは「激しい憤りはかれの内部の俗物と偽善者が心の声に同意しようとはしなかったために生じたにすぎない」(S. 479)ことを知る。逆説的転換が生じたのである。市民は外部から黙殺された立場を、犯罪者は外部を黙殺した立場を意味するようになる。クラインの素質の半分だけが生活を営んでいたのである。クラインの市民的先入見、すなわち自己の内部の「公認されている神の世界」が「黙殺されている悪魔の世界」<sup>9)</sup>を隠蔽しようとしたのであり、黙殺された半分が激しく抵抗した現われが憤りであったのだ。「デミアン」のなかで、ヘッセは兄弟を殺害たとされているカインに関する会話で、優れた能力と勇気、大胆さを有する人間を他の臆病な人間達が怖れたので、「かれにはしるしがある。神がかれにしるしを付けたのだ」<sup>10)</sup>と語らせているように、「カインのしるし」は市民にとっては恐怖の対象ではあるが、「黙殺されている悪魔の世界」に踏みこんだ犯罪者にとっては名誉のしるしに他ならない。憤りの正体の認識は市民が対立させられている二つの世界を統合し、より高次の自己形成への変身の予感であった。無限の変身に不安の時はない、過酷な受難の時があるだけだ。存在と人間性は本来的に曖昧なものとする前提をふまえ、たとえ人生のもつ酷薄さに失望し無抵抗であるように見えようとも、ヘッセは人間の存在様式の美化、外見上の補綴をやめその低俗と醜くさを甘受したうえで、新しい様式の可能性の発見を試みているとは言えないだろうか。自己のデモーニッシュな部分を——殺人者ワグナーと同様クラインも妻を殺害することで解放されたい欲求がありそれを夢想することがかれを悩ませていた——「使用人のきまじめさと無味乾燥な名望という重圧の下で自己の心の牢獄につないでいた」<sup>11)</sup>クラインは今、犯罪者であり逃亡者となっはじめて殺人者ワグナーに親しみを覚え、近い存在であると感じることが可能になったのである。殺人者ワグナーとともに、作曲家リヒャルト・ワグ

9) H. H. G. S. Bd. 3 „Demian” S. 157

10) a. a. O. S. 126

11) Heinz Stoltz: Hermann Hesse Weltschau und Lebensliebe. Hansa Verlag 16  
71 S. 128



ナーの名もここには重ね合わされている。「このようなワグナーを生み出し彼のこの世ならぬ作品をまるで偶像を崇拜するように敬慕する民族が狂暴な人間となって戦いのなかに身を投じ、すべてのロマンティック、すべての愛を忘れてしまえるということがどうして可能だったのか？」とH. バルはドイツに対する詩人の批判を代弁している。更にR. ワグナーと市民クラインとの関係について「そこには本能の矛盾性があるのだ、その矛盾性はあきらかにロマン的精神の特質としてドイツ的なものの特質を勤め人クラインの特質に結び合せてい<sup>12)</sup>」と指摘している。クラインはかつてこの芸術家を愛し熱中していた。しかし市民クラインは快い遊戯を官能の享受を否定しようとする。人間が有した生命ある歴史を創造し連続性を保持させる原動力である生の側面を覆い隠そうとするのが市民世界なのである。しかし「アポロ的なものとディオニソス的なものの融合がある<sup>13)</sup>」芸術家の名は「理想的な生」の象徴であり、市民クラインの内部の奴隷化された感性と熱情の化身に他ならない。

南国の町でクラインは二人の女性に出会う。一人は踊り子のテレジーナである。美しく神秘的に踊るテレジーナに、「外部に関係なく自分の甘味な感情にひたって、内部から花ひらくように微笑む」(S. 505) 踊り子にクラインはたいそうな興味と誘惑を覚える。テレジーナの踊りは何ものにもとらわれることのない自己表現であり、感情や欲求の全く素直な肯定を意味しているからである。踊るテレジーナの内部にはあの内的な状態が生まれている。すなわち、内部の対立と矛盾さえもが踊りという行為に際して、踊り子が有する機能を最大限に発揮させるための触媒となり、その結果、対立と矛盾は克服されてしまっているのである。市民クラインの生活に自己の全的素質の実現の為の能動的、意欲的態度はなく、倦怠と惰性の連続性があったにすぎない。たとえかれがいずれかの行為や態度を示した際でも、欠乏するものを満すがた

12) H. Ball : S. 174

13) a. a. O. : S. 174

14) 藤田健治：ニーチェ S. 40



めの限られたそれであり、世俗的欲求を満足させる目的のための手段であったにすぎず、より高次の自己形成、真の「生」への連結は見い出されない。テレジーナの「生」への盛んなバイタリティーと激しい執着そしてともに在ることがクラインに刺激とわずかな喜びをもたらしはする、しかし「テレジーナはかれの心の状態をぼんやり感じはするものの、クラインを『あなたは自殺する人<sup>15)</sup>のようだと面責する』だけでそれ以上は救うことはできないのである。」テレジーナもまた犯罪者にたいして奇妙な印象と不思議な魅力を感じて、かれにさまざまな問いを投げかける。しかし市民から犯罪者へ渡る橋は理解するものではなく体得するものなのであり、クラインは「いたずらに、理解しがたいことを説明しようと試みているのを感じる」(S. 514)ばかりである。犯罪者は市民世界でなじんだ一切を捨てようとしているのであり、言葉の機能はそれらを互いに遣り取りするだけのものであって、たとえそれらを知り確認したとしても相互の連帯が生じたと錯覚させるにすぎない、むしろ相互の隔りは一層広がるばかりである。もう一人の女性はクラインが少しのパンと束の間の眠りを乞うた料理店のおかみさんなのだが、夫とは不仲な女はクラインに懐かれることで慰さめと安心を得ようとかれの部屋を訪れる。淋しい市民と孤独な犯罪者の抱擁は労りであった。この二人の女性との関係は一方で「個人は自分自身にならなければならない、そして自分の自我、自分の真正の実存の立場に立つことが孤独な『アウトサイダー』の運命を受け入れなければならないことになるとしても、そうしなければならない<sup>16)</sup>」とする隠者ヘッセの想いであり、一方ではトレルチが「世界大戦はまず第一に、しばしばいきりたった、極端な理想主義者が主張している精神と文化の対立ではなく…権力と生活が重要だったのであり、その他の一切は重要ではなかった<sup>17)</sup>」と指摘している第一次世界大戦と戦後の文化的危機に瀕したドイツ、連帯感

15) Christian I. Schneider : Das Todesproblem bei Hermann Hesse. Elwert Verlag Marburg 1973 S. 156

16) F. パッペンハイム (栗田賢治訳) : S. 18

17) Ernst Troeltsch : Deutschegeist und Westeuropa. Scientia Verlag 1966 S. 31



は希薄化し、倫理が失われ、空虚でセンセーショナルな刺激と享楽的なものへと流されてしまう精神的荒廃への詩人の失望感、そして「他の人間と自分との間には真の心の交流はありえない、もともと愛するものにたいしてもそれは不可能だ<sup>18)</sup>」とする詩人の拭いきれない寂寥感に他ならない。もはや人間関係を律しているものは論理ではない、真の対話は生まれはしないのである。

市民世界で身に備わったものがまだクラインに迷路を歩ませはするが、「生」の抛り所は自己の内部にのみ存在し、「自分自身と争わず、自分自身に愛と信頼をもって生きる…そうすれば何事でもできる」(S. 503)とクラインはつぶやきながら「ひとがかれに禁じている事を行ったものということを意味している」(S. 510) 犯罪者として自分自身を明確に位置づけようとする。人間の有している意識の下にあるところの衝動的欲求が、本来的に思いもかけない危険で狂悪なものへと走り出す可能性を含んでいるとき、自己のこのような側面を肯定し容認するためには自らの人格全体に対しての全き信頼と肯定がその大前提として必要なのである。人間が義務であろう法の遵守を怠る時にのみ、かれが犯罪者となるのではなく、自己の有する素質、あるいは人格全体に対する不信と疑惑もまた重大な犯罪となるのである。したがってクラインがかれの内部のワグナーと和解することはすべてをあるがままに受け入れようとする詩人の覚醒に他ならない。

## 夢

F. ベトガーが「第一次大戦後のドイツ文学が好んで取りあげている秩序に反した、危険に身を投じてしまう市民というテーマに…深層心理の助けをかりて独特の方向転換を与えている<sup>19)</sup>」と、また、H. シュトルテが「フロイト<sup>20)</sup>わ精神分析の影響が特にはっきりとある」等と指摘しているように、ヘッセ

18) Colein Wilson : The Outsider. Pan 1956 S. 60 中村保男氏訳を使用させていた  
だいた

19) F. Böttger : S. 271

20) H. Stolte : S. 126



はクラインとワグナーとの和解の手掛りとして夢に重要な役割を与えている。夢の中でクラインは「ローエン・グリーン」あるいは「ワグナー」と書かれた劇場の入口のような門をくぐりぬける、そこには二人の女性がいるが、クラインは一方の女を突き刺し、そしてもう一方の女がかれを締め殺そうとするという奇妙な出来事を体験するのである。奇妙な夢の体験は、クラインに、劇場がクライン自身であり、「自分自身のなかへ、真実な内部の見知らぬ国へはいれという勧めではなかったのか…ワグナーはかつての勤め人フリードリッヒ・クラインのなかのすべての抑圧されたもの、沈みこんだもの失敗したものの集合名詞である」(S. 529) ことを暗示しているのである。一人を殺し、他の一人に殺されかかる夢は市民世界の秩序に於いてさまざまに自分自身を抑圧しなければならない分裂的状况を象徴的に表わしている。市民と犯罪者という二人のクラインを隔てるしかしあまりに大きな深淵を克服する困難さに<sup>21)</sup> 病み、疲労し「極度に刺激された神経が反乱を起した無意識状態の発作」からかれは踊り子を殺そうとする。この一瞬、かれの内部では犯罪者が市民を完全に覆ってしまっているのである。衝動的欲求に基づく行動と意志に基づく行動とは本質的には敵対するものではなく、むしろ意志に基づく行動も本源的な生命欲求を基盤にしている以上「それがどんな具合であれ殺人と愛は勤め人クラインの魂の根底で密接に関係を結びあっている」<sup>22)</sup> のであった。クラインは狂気のような殺人を犯するまでには到らないものの、「殺人犯ワグナーとのかれの同一性の認識は、同時にあらゆる生あるものとの同一性の認識であり」そしてかれは長い道程をへて自己克服の分岐点をいま見出したのである。

## 入 水

物語のクライマックスで「弱点であり、ヘッセが先祖のロマン主義者から

21) a. a. O. S. 128

22) H. Ball : S. 175



受けついで遺産である」<sup>23)</sup> 詩人の魔術が出現する。

ヘッセは、魂こそが我々の各々に全く固有のものであり、我々の生はその魂を信頼し抛り所としなければならないとしており、その魂がもたらすであろう「自分の運命を肯定し、あらゆる事物の運行にあらがわれなければ必要な苦痛を免がれる」<sup>24)</sup>と考えるのである。すなわち、各々が各々の魂を祭壇にささげた個有の宗教を確立することだと言えるだろう。南国への逃亡者はもはやクラインでもワグナーでもない全く新しい存在に変化している。自己の魂へ市民も横領犯も殺人者もその他の一切のものを宥和させたのである。その結果、嫌悪に満ちていたはずの妻との生活にさえも意味と発見が生じる。ここに到るまでの道は惨めさと苦痛の連続であったが、それさえも今のかれには「悩むこと、苦悩の涙のもとで成熟、発酵すること、打撃と痛みのもとで鍛えあげられることは十分に良いこと、そして救済されることであった」(S. 528)と感じられ、「更にそうすれば死んでもよい。そうすればそれは立派な死、美しい死、意味ある死であった、この世でもつとも幸福なものだった」(S. 528)という具合にかれの想いは変容するのである。かれに安らぎがおとずれる、と同時に「死への欲求、消滅することへの郷愁、神のふところへ帰ろうとする郷愁というかれの心の奥底からの憧憬」(S. 537)にかられてクラインは楽しげに湖へボートをこぎ出し、水中へと身をすべらすのである。ボート上のクラインの意図するところは、まだ行為の結果、すなわち「死」という調和がとれ、安定しているかのごとく思われる状態への到達におかれていた。ボートから水面へのわずかな瞬間、かれの内部では外部依存、自己防衛、市民的義務感、先入見等の一切がえ消ていた。その瞬間は過去からの脱却ではあるが、同時に決して将来のために自分を抱束するというものでもない。クラインは特定の対象「死」に向って邁進している、すなわち「人間のいかなる低次の欲求が——それがいかに醜い動物的衝動であったとしても——これが人

23) Colin Wilson : S. 58

24) Gerhart Mayer: Die Begegnung des Christentums mit den asiatischen Religionen im Werk Hermann Hesses. Ludwig Röhrscheid Verlag 1956 S. 66



間性の基礎であり、また現実であるかぎり排除すべきでない<sup>25)</sup>」という態度をヘッセはしめしている。クラインの自殺に関してF. ボルノウは「人間が有するすべての困難と不確実な冒険性の肯定を意味し、またそれは他の出口が与えられていない時には人間の死をも肯定している<sup>26)</sup>」と述べ、G. マイヤーは「クラインは自殺し『母のふところ』へ…帰ってゆく…母のなかには子を産み守るという生活原理の機能のなかで先験的、神秘的な神格性が実体化されている<sup>27)</sup>」と述べ、またF. ベトガーは「溺死しようとするなかでの自己と宇宙との妄想のような一致は、帝国主義的のドイツ市民に虚無的な目標として示されるもっともらしい展望となる<sup>28)</sup>」と述べている。

ヘッセが自己の確な存在を掴み取ろうとする時その著作にとっては、思想的、歴史的観点から眺める所謂、政治的、社会的状況に対する批判はどれほどの比重を持っているのだろう。かれは慎しい表現で現実に対する感覚の不足を指摘する声を認めながら「所謂、現実には私にとって非常に大きな役割を演じてはいないので、過去がしばしば現在と同じように私の胸を満たしそして現在あるものが私には無限の遠くにあるように思われるので…<sup>29)</sup>」と語っているが、クラインが自殺をはかる舞台もまた、メルヒェンとも言える夢想の世界、転換の奇跡がおとずれる世界、魔術が不可能を可能にする世界に置かれている。そこでは死に到らんとした瞬間、突然に一切が解決されるのである。不安を恐怖を「生」がもたらす一切のものを「死」への飛行が消し去り、「生」の有する一切の意味が解き明かされるのである。ヘッセは帰着点を見い出したかのように「不確実なもの、未知のものへ自分自身を投げ出す。それがかれの人生の帰結としてかれの全ての本質を貫いてひかり輝いた」(S. 549)とクラインに叫ばせている。

25) 上田吉一：自己実現の心理誠信書房 S. 192

26) Friedlich Bollnow : Uuruhe und Geborgenheit. Stuttgart 1958 S. 43

27) G. Mayer : S. 97

28) F. Böttger : S. 274

29) H. H. G. S. Bd. 4 „Kurzgefaßter Lebenslauf S. 480



湖水に身を投げだし、水中を漂ようクラインが次のように描写されている。

「かれのそばをぴたりと…他の人々が泳いでいた、テレジーナ、年若い歌手、かつての妻、父や母や妹、何千もの他の人々が途方もない流れとなつて…幸福なひとびとの歌そして不幸なひとびとの果てしない苦痛の叫びから二つの世界の流れの上に音の透明な球体あるいは球天井が建ち、音楽の大寺院がありその真中には神がすわりそして明るさのあまり見えないほど輝く星があり、光の化身が世界の合唱に囲まれて永遠の怒濤のなかですわっていた…」(S. 552 ff)

## 未了

永続する赦しも救いもない日常的現実恐怖した人間がそれを免れるには自己の一切を投げだすという諦念に到達するしかないのか。

かれが死に到らんとする姿のなかに我々はしかし魂の半分を占める暗い部分を肯定し相反するものの統合体として更に高次の「生」の有様をめざすその歩みを見いだすよりも、市民であり逃亡した犯罪者であり、そして自殺志願者であるクラインが不明瞭な救済の恍惚体験に酔いしれているのを見るばかりである。自己のデモーニッシュなものがあらゆる体験の裏側にあって密かな「生」の原動力となっていることを知ったクラインを何が死へ赴かせたのかは少しも報告されないままであり、また身を投げだしたかれが何処へたどりつくのかも知らされないままである。確かにクラインは「混沌を見る」ことへの運命の促しを諒解し、エミール・シクレールと同様「情落は必要だったのであり、人間は善悪の果実を食べねばならなかったのだ<sup>30)</sup>」との決論に達したと言ってよいだろう、しかしそれでかれの運命はその促しを停止し沈黙するのか。「運命というものはどこか外部から来たのではなく、自分の心の中で成長してきた」(S. 481)はずではなかったのか。全的宇宙的生命の根源としての湖へ帰る意味に於いてかれの入水は歓喜に満ちているのか、あるいは一切を肯定し生は甘味なものとなり、その帰結としての死は一層甘味な

30) Colin Wilson : S. 58



ものなのか、遥かなるもの、限りない憧憬を抱かせるものの本体こそが死であったのか、「死」という計り知れない深淵をかいま見る瞬間になお再生の逆説的奇跡が実現するのか。入水という極限状態、カタストローフによって壊滅した日常的現実の廃墟のなかでしかクラインは真正な生の導き手である自己自身と一致することができなかったのか。何も語ろうとしない詩人は最後の救済と解放に揺ぎない確信を抱いているのか、「かれがその作品の典型だと感じているところの彼自身の生を説明しようとする」<sup>31)</sup>ヘッセ自身はまだ相反する二つの世界、二人のヘッセ、クラインとワグナーの間での停滞に苦慮しているのか。

「ヘッセにあっては表現だけが穏やかなのであって感情も思想も決してそうではない。このような感情や思想の表現をやわらげているものは、礼節の慎しみ深さの、調和のそして宇宙に関しては事物の相互依存の典雅な情感である」<sup>32)</sup>というジイドの論は決して否定されるものではないだろう。しかし主人公の死についての未解決な部分が「ヘッセ文学の醍醐味である所謂ロマン主義的諸要素すなわち『青い花』への永遠なる憧憬、夢想性、抒情性、有機的自然観、神秘的主義的雰囲気…」<sup>33)</sup>に代表される印象を「クラインとワグナー」に於いても一層その色を濃いものにさせていると言えないだろうか、我々の生が因果律でははかれない無数の意志となる可能性を含んだ集合体である時、合理的論理的様式では人間の全的な生を解き明かしえない。「クラインとワグナー」に於る非合理的、非現実的展開は可視なものの裏側にある不可視なものをつかみだそうとする試みとして十分に諒解されるものではある。しかし自然な人間感情を枯渇させ、無味乾燥なそして芸術家さえも産業構造のなかへ繰り込まれる時代、人間が周囲に対して利害を十分に計量しながら欲望を抑え現実にもっともかなった態度を選び、ひととひととがもっとも効果的な手段としての契約関係にある時代、そのような時代の精神とそこに生

31) H. Ball : S. 176

32) A. ジイド：秋の断想（原田義人訳）筑摩書房 S. 217

33) 根本道也：ドイツロマン主義とヘルマン・ヘッセ ドイツ文学25 S. 40



きねばならぬ人間の有様を見ようする時、ヘッセが強い調子で「現実というものは…どんな状況のもとでも、崇拜したり尊敬したりしてはならないものである。というのは現実というものは偶然であり、生活のごみであるから、そしてこのすり切れた常に幻滅を感じさせるそして荒涼とした現実…」<sup>34)</sup>と決めている現実と詩人との衝突が更に探られねばならないし「クラインの死」に関する未解決な部分が更に追求されねばならないだろう。

---

34) H. H. G. S. Bd. 4 S. 483.